

八女市矢部村（旧矢部村…2010年に八女市に編入）は、福岡県最高峰である釈迦岳を擁する山間部の集落であり、南北朝時代の遺構も残る歴史と文化の地でもある。本地域は林業が生業として営まれてきたが、2018年にその歴史、森林との関わりを示す資料として木馬道と木場作林業に関わる史料が林業遺産に登録された。

村内の山林は江戸時代は柳川藩領であり、禁伐とされて厳重に管理されていた。明治以後、矢部村でも藩林を引き継いだ官有林を中心に積極的な木材生産が行われた。林内での木材搬出は木馬道が主体で、その技術・様子を伝える資料が多く残されており、これらは杉のふるさと文化館の一部が展示され、往事の技術水準を確認することができる。生産された木材は熊本通信局により電柱材とされたほか、佐世保海軍工廠に運ばれて軍艦の甲板に利用されたという。旺盛な木材需要に対応するために、明治35年に矢部村臼ノ払に八女地域で最初の製材工場が設立された。明治43年に村内の官有林である「正粉官山」から臼ノ払の製材工場まで木材を搬出させるための林道が建設された。この林道開設を記念して作られたのが、後述する開道記念碑である。

開設された林道は、地域にとって単なる木材搬出以上の意味を持っていた。それは本地域で営まれていた木場



杉のふるさと文化館 内部

日本森林学会による

# 日本の林業遺産を知ろう！

第18回 矢部村における木馬道と木場作林業

鹿兒島大学農学系 助教 奥山洋一郎



杉のふるさと文化館 外観



開道記念碑 (明治43年)

作林業との関わりがある。木場作林業とは、スギなどを疎植そじくにすることで林内の畑耕作りくち(陸稲やアワ・ヒエ、イモ等)と林業を両立させる施業である。疎植にすることで耕作用地が確保ができると同時に、この林内耕作は下刈り等の作業を兼ねることもなる。木材とし

ても年輪幅が広くなり防腐加工に適するため、電柱材の生産に利用された。明治43年に開設された林道は、この木場作で生産された食料を里に運ぶという役割も担っていたのである。



世界子ども愛樹祭コンクール 入賞作品

本地域の木場作の歴史は柳川藩時代にさかのぼる。用材は藩の土木、軍事資材として管理されたが、林内での食料生産を禁止することはなかった。これは平地が少ない本地域では食料生産を木場作に頼らざるを得ないため、また村民による営林管理といった側面もあっただろう。この地元利用は明治期以降も継続されてきたが、特に戦中期・戦後初期は疎開者の受入等もあり、人口が急増したため木場作は欠かせないものとなった。しかし1950年代に入ると、食糧事情も改善されてきて木場作の必要性が失われて、建築用材の需要が急増する中で植栽本数も増加していった。1960年にダムが建設されると、臼ノ払地区も道路が改良されて、林道の開道記念碑も行方不明となった。



林業用具の展示 木負い子

地域の人口も減少する中で、このような林業の歴史も風化しつつあった。ところが、近年になり、その状況が変わってきたのである。そのきっかけとなったのが、開道記念碑の「発見」である。仁田原石義開道記念碑保存会代表によると「集落に碑があったのは覚えていたが、ダム工事の際に撤去されたと思っていたとのことであるが、2010年に近隣の私有林内で記念碑が偶然発見された。地元有志により開道記念碑として確認されて、臼ノ払の地区内に復元設置された。本記念碑の特徴は、台座、中段、碑文が全て三角形という点である。三角形の碑は珍しいが、これは林道開設により、「官有林」「民有地」「一般住民」の三者が恩恵を受けたことを表現していると考えられている。栗原浩暢杉のふるさと文



林業用具の展示 木挽き鋸

化館館長は「この発見により、過去の写真・道員等の収集、保存の気運が高まり、林業遺産の登録までに至った。記念碑は地域再生のために50年の時を経て還ってきてくれた」と語る。矢部村では1991年から世界子ども愛樹祭コンクールとして森林を題材とした絵画、詩、作文等を募集しており、入賞作品は杉のふるさと文化館に展示されて、林業遺産に登録された資料と同時に観覧することができる。今後、地域内では木馬道の跡を歴史を学ぶコースとして利用する考えもある。木田博徳八女市矢部支所長は「国有林とも協力しながら、安全を確保して地域活性化に活用する方法を考えていきたい」とのこと、林業遺産登録を契機に森林と地域の新しい関係が構築されることを期待したい。



文書資料 (愛林組合規約等)



木馬作業の写真資料